

死語としての「浪漫主義」

——十九世紀フランスの「七月王政」Monarchie de Juillet
(1830—48)の素描——第一稿

井上英明*

序説

比較文学や比較思想史、さらに文芸批評や美術評論などにおいても戸惑うのは、日本が近代になってから頻繁に使われ出し、そのくせこんにちの若者には本来の意味が失れてまさに「死語」と化しつつある「浪漫主義」という「輸入語」もしくは「訳語」である。

「浪漫主義」の説明はほとんどの文学・哲学・美学その他の辞・事典類が説明しているし、一応、狭義の定義では、人間精神の自由を求め、時代の虚偽や醜悪に反抗し、個人の主観の中で言語や物に意味と形と情感を与え、現実を超えた幻夢の美的世界を創り出すといった風に落ちつく。だが、このような教科書風の「定義」は人間の諸経験の表現形態という観点からすると、どこか逆に自然科学の一種の機械論

的、還元論的方法に似ているところがあって、どこにでも応用が効くが、最終的にはどこにも適用できないものである。

ところで十九世紀初期ドイツ文学の最高峰はなんといってもゲーテの『ファウスト』(一八〇八年第一部刊、一八三二年第二部刊)であろう。その第二部にメフィストフェレスと小人ホムンクルスとの対話としてつぎのような台詞が交される。引用文は森鷗外訳に従う。

メフィスト そんな催しの事はこれ迄、聞いたことがない。

小人 それはあなたの耳に這入る筈がありません。あなたのお馴染みはロマンチックの化け物だけです。化け物でも本当のはクラシックですよ。

この「小人」の台詞の解釈は、いかにもむづかしい。¹『ファウスト』の読者ならすでに周知のことだが、アリストテレスからゲーテに至るまでの二千百余年に及ぶ西洋の「学問」や「知識」では、到底世界の深奥を支配する「道理」の謎は解き得ないとして、失意に沈む老ファウス博士。かれは悪魔のメフィストフェレスに魂を売りわたして二十代の青年に若返り、グレートヘンとの恋愛体験をするが、失敗し、「古典美」の典型たるヘレナと結婚することによって「美」の世界を獲得するが、これまた失敗に帰す。メフィストフェレスという「悪魔」も所詮は老ファウス博士の暗い情念を嚇す「ロマンチックの化け物」だと揶揄されたのか。ではなぜ「化け物でも本当のはクラシック」なのだろうか。ヨーロッパにおける人間精神の弱体化、言いかえれば、ヨーロッパ人の分割された同一人物としてのいわゆる「近代人」が本格化するのはこのあたりからである。

一転してこんどは十九世紀フランス近代詩を代表する『悪の華』の詩篇中、屈指の長篇から引く。

われらが魂は、「蓬萊」を探し索むる三檣船、
甲板の上、高らかに響かふ聲は、『見張せよ』。
檣樓の聲、熱烈に狂へることく、叫ぶかな、
『愛よ……榮譽よ……幸福よ』。
興ざめたりや、そは暗礁。

見張の水夫の合圖する一つ一つの島はみな、
『宿命』によりて約されし「黄金郷」の出現なり、
祝ひの宴華やかに整へて待つ「想像」の、
朝の光に見出づるは、無残や、唯これ暗礁のみ。

あはれ、架空の國國に憧れわたる人間よ、
大滄溟の潮騒の苦味いや増す辱氣樓……

「蓬萊」Icarieといい、「黄金郷」Eldoradoといい、「架空の国」pays chimériquesといい、それが「暗礁」écueil, récifであることの詩人の痛切な認識は、まさに「浪漫主義」の無残なユートピアに相違ない。だが、もし、このボードレール（一八二一—六七）の詩を「文学」としてではなく、社会学の記述として読むとしたら、この詩的言語の結晶も、十九世紀フランスのブルジョワジーという階級の衰亡する壮麗な戯言でしかなく、また詩人にそうした言語の恥溺をゆるして

いるのも、樂園は墓場であり、幸福は破滅であり、殉教は屈辱であり、自由は恐怖であり、尊大は怯懦であることと同義反復であるように読まれかねない。ひたすら「悔恨」において偉大であったといわれるこの詩人の魂の哀歌は、おそらく永久に理會されないままでであろう。

この『悪の華』が人びとに「新しき戦慄を与えた」頃、ベルギーとの国境に近いアルデン県シャルルヴィ市に生まれ、『イルミナシオン』（二八八六）・『地獄の季節』（二八七三）の早熟の天才詩人、アルチュール・ランボオ（一八五四—九二）の書簡には、つぎのような一節がある。

浪漫主義が正しく判断されたためしはないのです。一体誰がそれに判断を下すのでしょうか。批評家ですか！浪漫主義者ですか。

まさに「見者の手紙」かもしれないが、それは十九世紀から二十世紀の前半、さらにこんにちになお、とくにわれわれの大多数を支配し呪縛してきた科学的、客観的、実証的態度を金科玉条とする「研究者」のみから依って立つ立場の自己矛盾を嘲笑しているかのように聞こえる。わたくし自身は「批評家」でもなければ「浪漫主義者」でもない。だからわたくしは浪漫主義を「定義」づけようとも思わない。ただ、明治も二十年代になって遅れてやってきた「日本近代」文学における「浪漫主義」、とくにその中核的存在となり、日本文学史上はじめての「浪漫主義者」として不幸短命の生涯を終えた北村透谷（二八六—九四）と雑誌『文学界』に集った詩人作家の社会的環境や精神状況、さらにはこれまた死語と化しつつある泰西舶来の「自然主

「義」という「訳語」の日本近代における虚構に次第に苛立ちを覚えるようになったのが、実を言えば本稿起筆の主なる動機である。

本稿はわたくしがはじめて「日本近代」文学について公表するものであるが、その前に、そもそも「浪漫主義」なるものは、ヨーロッパ精神史上、あらゆる分野において最も重要な「転換期」の一つを代表し、その歴史的役割は、結局、十九世紀ヨーロッパの自由主義と関連において把握されなければならないという認識を前提にしている。つまり、自由主義的立場に立って、われわれが「浪漫主義」という「化け物」を考察する時、それは必ずといってよいほどあらゆる事象を「反動的要素」として——例えば王政復古運動、教権主義、現実からの逃避、中世騎士道的封建制への心酔、権力崇拜等々——を強調しがちである。たしかに「浪漫主義」は、「主義」としてそのような世界観を代表するものであるが、西ヨーロッパ——特にフランス——の「浪漫主義」の場合においてのそのような説明は、歴史の記述をいささか歪曲するものだと思われる。

十六世紀のはじめのヨーロッパには二人の天才がいた。そしてこの二人の天才の書物が『君主論』と『ユートピア』であったことに、わたくしは格別の興味をいだきつづけてきた。このマキャヴェリ（二四六九—一五二七）的「国家」観——国家を維持発展させるための必要條件としての正理と暴力の併用、狐の狡知と獅子の威の必要性——と、トマス・モア（二四七八—一五三五）的「社会」観——国家像としてはカトリシズム的な一種の社会民主主義・共産主義的経済機構によって社会生活のユートピア的至福を夢想する——の両者が、その後のドイツ、イタリア的ヨーロッパと西ヨーロッパとのそれぞれの政治的運命を荷負ってきたからである。専門家は措いて、一般の日本の知識人は

戦後の学校教育でドイツ浪漫主義は初期の革命的態度から、反動へ、西ヨーロッパのそれは王党的、封建的態度から自由主義、立憲主義へと「発展」してきたと説明されてきた。今世紀のドイツ、イタリアを中心とするファシズムの政治的概念が、いかにドイツにおける浪漫主義時代の美学的、形而上学的概念に源を発しているかを説明する著述もある。この時代に特有の概念として超越的観念論と浪漫的美学の全体主義的観念が、やがてニーチェの『権力への意志』やワグナーの激情的旋律に受け継がれ、同時にまた権力としての「国家」への浪漫的礼賛は、ついに今世紀において絶頂に達し、ナチス・ドイツのヨーロッパに現前した凄まじい光景の本質的役割を演じたというのが、ヨーロッパ人の二十世紀歴史解釈の核心となつていふこともまた事実である。⁴⁾

ところが、このようなドイツ的政治概念に、日本近・現代史解釈が巻きこまれていふのもまた事実である。それはドイツ的、イタリア的ファシズム弾劾のためのヨーロッパ的概念による怨恨にみちた世界史「解釈」の一つではあろう。しかしながら、十九世紀初頭に「浪漫主義」によって蒔かれた「反動」という歴史解釈の種子は、けっしてドイツではなくフランスの方に勢力的であったこともまた歴史解釈の事実である。それはド・ボナールや、ド・メーストル等によって代表されるネオ・カトリシズムに深く根を張っていたからである。だが、ドイツの浪漫主義者とフランス（あるいは部分的にイギリスも含めて）のそれとの根本的な差異を指摘すれば、ドイツの浪漫主義者は「国家」という概念と「社会」という概念とを区別しなかつたことである。かれらはあらゆる個人的権利の擁護を「国家」に求めたのである。

サン＝シモン（一七六〇—一八二五）やフウリエは、フィヒテやヘーゲル等とほぼ同時代に生きた哲学者たちであったが、かれらは「個人」をそのまま「国家」に結びつけようとはしなかったし、個人的危機の救済を権力としての「国家」に求めようとはしなかった。「個人」と「国家」との間に、かれらはたえず「社会」という共同体としての共生の理念を追求している。社会の完全性が全人、あるいは各人の自由に比例し、すべての人間がヒューマニティーであり、自分自身のうちに社会全体を反映させようとしたからである。だからといって、フランス近代が資本主義のもたらす経済恐慌をまぬがれたというのではない。

わたくしは社会学や経済学にはまったくの門外漢である。「歴史学」の学徒ですらない。ただ英語圏と日本語圏の大学で長い間、日本文学史を講説してきたものの一人として、この「浪漫主義」・「浪漫派」などというタームを見るごとに、いささか滑稽、珍奇に似た凡庸な感情に翻弄されてきたことは、わたくし個人の不明と無識はさておき、今になお消去しがたい切実な体験である。内外の専門家からの高慢不遜の譏りを覚悟の上で、フランス十九世紀前半、一八三〇年から四八年までの *monarchie de Juillet* に栄えた「romantisme」の下部構造の社会的危機の叙述に本誌紙幅の割愛を願ったゆえんである。かさねて言えば、「翻訳」とは人体が複雑骨折していく過程でもある。本来、「句読点」一個すら存在しない伝統的に縦書きの日本語に音義を兼ねて暗記させられる横文字の学術用語の受諾は、少なくとも言語芸術による表現の世界にあって、たんに無邪気と怠惰による自己放棄の過程でしかない。「訳語」となった「浪漫主義」のそもそもの発源地の一つたるフランス十九世紀の前半に焦点を定めて、最終的には極東の島

国の「浪漫主義」なるものの実態究明の出発点としたいのは、本稿がわたくしの目下の構想の中にある叙述全体の「序説」のそのまた「序説」の役割りをもつからである。本稿の表題の末尾をあえて「素描」としたのも文字通り門外漢のスケッチそのものに過ぎないからである。

I 「七月王政」における浪漫主義運動の社会的背景について

「七月王政」は短命であったとはいえ、フランスの「産業革命」を急速に進展させた時期であたる。そこで――

ヨーロッパにふたたび戦乱の危機が迫りつつあった一九三五年のフランスにおける或る雑誌には、その年から丁度百年前のフランスについての尚古めいた追憶の記事が認められる。

「……そこには現在において、あるいは未来においてさえ信頼があった。百年前には、生活のための仕事は今日におけるよりも安易なものであった……。葡萄は平和な空のもとでたわわにみどり、人びとは飲めるに充分なだけの葡萄酒を地下室に貯えた……。中産階級は自分たちの貯金箱に、政府発行の有価証券を有し、ポケットには金貨 (Louis d'or) を持っていた……。ある代議士は議会の演壇からつぎのように宣言している。すなわち、《吾々は、大いなる平和な時期を楽しんでゐる》と。」⁽¹⁾

この時期の詩人や小説家の作品をこんにち繙いただけで、いかにそれらが前世紀十八世紀とは全く趣向を異にした情感と個性に満ち溢れ

ているかを、フランスの読者なら容易に認めるであろう。たしかにかれらは、こんにちにくらべれば「幸福」な時期を生きていたに相違ない。若々しい新興ブルジョワを背景に、そこには芸術において、あるいは産業において、前世紀とはくらべものにならない業績が陸続としてもたらされていたからである。

例えば、ベルリオーズ、ドラクロワ、リスト、シヨパン、ミシュレ、ラマルティーン、コント、サントブーヴ、スタンダール、ユーゴー、バルザック、ミュッセ、ヴィニイ……一八三五年のフランスにおけるこれらの芸術家たちの名は、こんにち一般読者、鑑賞家の間ではわずかに余喘を保つものの、一九三五年においては依然として大きな存在であった。なぜなら、かれらの芸術や思想こそが、こんにちわれわれに一つの文明、一つの社会を評価する規準を与えてくれたからである。²⁾ およそ一八三〇年を中心とする十年間は、フランスの芸術があらゆる分野において革新を試み、そのかぎりにおいて最も充実した時期でもあった。大革命がすでに過去の思い出となり、ヨーロッパに君臨した一世の英雄も歴史の舞台からその姿を消し去った。しかしながら大革命とナポレオン戦争の間において、これという芸術作品を認めることができない。この期間は少なくとも芸術においては不毛の時期としか言いようがない。その間のフランス人たちは、うちつづく政治の転変と、いや増す戦火に活力と情熱は消耗され尽くし、芸術創造に従う閑暇を持ち得なかつたからである。だが、復古王政から七月王政にかけての時期こそは、「中産階級」が歴史の舞台に決定的に踊り出た時代であった。それまでの封建貴族に代って、金力をもつブルジョワが歴史の舞台に大きく浮かび出て、金銭こそが生活の原動力となり、同時に万人の渴望の的となつたからである。「門閥貴族」が没落

し「金力貴族」が出現して富める者は爵位を授かり、上院議員に列せられ、自己の利益に血迷い、大規模な商工業が企てられ、すべて金銭が目的といった実利的風潮が時代を支配し、前代の革命的・戦鬪的風潮とは著しく趣きを異にした打算づくめの世相を背景に、平凡な男が王位につく。かれこそは「公民然たる王」、あるいは「最良の共和主義者」³⁾とされてはいるが、シャトウブリアンのつぎのような批評が正鵠を穿つものであるう。

「フィリップが（他の連中に）まさっているのは本当ですが、たんに相対的なものです。社会がまだ多少とも、生命力をもっている時代のなかに、かれをおいてごらん下さい。そうすれば、凡庸さがはつきりとするでしょう……。フィリップは警察官です。ヨーロッパが、かれの顔につばをひっかけてもさしつかえありません。かれは自分でぬぐって、お礼を述べ、国王の身分証明書を見せます。それでも、かれはフランスが今支持することのできるただひとりの君主なのです」⁴⁾

幻滅感をこめた浪漫主義作家の弁舌とはいえ、七月王政における王権の象徴はフィリップの蝙蝠傘にあり、かれの連発する「中庸」という言葉は、英国人のコモン・センスほどの健全さはなく、俗物の権力の類語以外の何物でもなく、財界の大立物が出没するサン・トノレ街を中心に浮かび上るこの時期は、まことに両義に解釈される黄金時代を現出したといえるのである。

しかしながら、最下層階級の実情をみると、目を覆うばかりの惨澹たる窮状がくり展げられていた。D・O・エヴァンスは、サント・ブーヴがこの時期の社会的^{ソシヤル・フランス・レイシヨ}不満の一例として支配的な雰囲気の特徴

づけた芸術作品を紹介して、下層階級の実情をつぎのように論じている。

「この時代の最も記憶されるべき芸術作品は、ドオミエ Daumier、Honore の傑作、La Rue Transnonain であつた。その光景——労働者の下宿屋である——は、屠殺場とでもいふべき修羅場である。床には溢れんばかりの血の洪水で、惨殺された男の死体がベッドに横たわり、かれの側には死児が倒れ、薄暗い背景は、妻の方を隠しているようにみえる。一八三四年、四月の「大虐殺」は、児童労働組合運動アンファン・トレイド・ユニオン・ムーブメントの恐怖からひきおこされたものであつた。一万四千人の軍隊が動員され、この街における一ブロックの家では、十二人の罪もない人たちが血も涙もなく虐殺された。同じ年に、ドオミエは第二の石版画を出した。それは、手かせ・足かせをはめられて独房に繋がれた一人の若い共和主義者をえがいたものである。その青年を見張っているのは、法務長官であるが、この青年——共和主義思想の労働者——の眼差しは別の人物に注がれている。かれに対してただ、生き生きとしているのはフリジア風の帽子をつけた女性の肖像である。そしてこの絵の下方に、この芸術家（作者）は、つぎのように書きつけている。

“Et pourtant elle marche!”（それにもかかわらず彼女は前進す！）
一八三四年から五年にかけての社会の実状は、かかるグロテスクで陰惨なものであつた。⁽⁵⁾

ナポレオンに追われ、スタール夫人とともに若き日を孤独と憂愁の中に亡命貴族として過ぎなければならなかつたシャトオブリアンはフランス浪漫主義の父と称され、前浪漫主義の時代に、早くも「ヨーロッパ

ッパのデカダンスを発見した」文人・政治家人である。晩年、政治的には当時最も保守的な著述家となつたかれは、さきにあげた『両世界論』の約百年前（注I参照）のそれに、当時の状況を論じているが、その数行は、今世紀の両世界大戦で破壊されたヨーロッパ的秩序——所謂、「西欧の危機」と大衆の中に埋没した個人を象徴する「ファウスト的人間の没落」を、すでに直観している。『アタラ』と『ルネ』の作者は、すなわちつぎのように書く。

「……一つの社会。そこにおいて個人は二百万フランの収入を得ることができている。一方、それに反して、他の個人は、うじ虫の巢喰うこわれた材料で造られたあばら屋で生活することを余儀なくされている……あらゆる思想の発展の只中であつて、社会が、こうした根底のうえに持続し得ようか？ 新しい社会が何であるかは、わたしの知るところではない。古代人がキリスト教の生まれた奴隷なき社会を理解できなかったように、わたしはそれを理解できない。どうしたら富が平均化されるか、如何にしたら賃金が労働に應じて平均化されるか。どうしたら女性が解放されるか、それらはわたしの知るところではない。多分、人類（Human Species 原書はイタリックで書かれている）は、ある程度までには発達するであろう。が、しかし、個人は退歩し、ある卓越せる天才の能力は失われ、想像力や詩、そして芸術は、各個人が一匹のみつばち、機械の中の一つの歯車組織化された物質の中の一つの原子に過ぎなくなる。みつばち社会の小室において死滅するとなると怖るべきことになるのである。現代社会を建設するのに十世紀を要した。そして今やそれは解体して行くプロセスにあるのだ……没落する世界は、その解体していくプロセスが窮極の段階に達し

た時においてのみ、新しく活力を回復するのかもしれない。そこから後に、社会は新しい生活の水準に向って上昇しはじめるのかもしれない。(傍点引用者)⁷⁾

右の一文は産業革命の進展による資本主義制度の人的危機を見事に予見したものだといえる。事実、一八三〇年を境としてフランスの産業革命は新しい局面に入り、労資の対立という資本主義の内的矛盾の萌芽が露呈されてくるのであるが、まず、いちじるしい人口の都市集中とそれを助長する交通網の拡大や新しい機械の発明等々、マルクスの説く「産業革命の出発点」としてのかかる現象的側面が、つぎに指摘されなければならない。だが、その前に、七月王政成立直後に、はやくも今まで述べたような社会的矛盾が現出した理由は何であったのか。

七月王政を成立せしめた一八三〇年の「七月革命」の基本的性格についてはG・ガロディはマルクス主義の立場からつぎのように説明する。

「一八三〇年には、ブルジョワジーは自由というスローガンのもとに、労働者を闘いにまきこんだ。が、しかし、実際には、労働者はブルジョワジーにとっての自由、すなわち産業的自由のために闘わされたのである。ブルジョワジーは必死になって、この産業的自由こそ人間的自由には他ならないと叫んだのであった。かの印刷工のストライキの折に、下院に於ける動議提出者は、一八三〇年一月、一日、あつかましくも次のように公言した。あの銘記すべき七月の闘争に於いてあれほど勇敢にしかも献身的に闘った労働者が、われわれ

れの産業の発展にとつてかくも必要な自由を浸蝕するぞ、とわれわれに申し入れる決意をいただいたとは、まさにおどろくべきことだ——しかも政府は、賃金について政府の保護を要求してきた労働者にたいして諸君がそのために闘った産業の自由の原則を、諸君は忘れてしまったようだ」と答えたのである。⁸⁾

つまり、ガロディの説くように、それはブルジョワの利益のための革命であるとはいえず、これに協力した民衆ないし労働者は自己の階級意識を明確にしてはいなかったのである。

新しく歴史の舞台に登場して来たブルジョワは、それ自身は若々しいものであったはずであり、「王政」における自由党(後の共和党)が、あんなに普通選挙権に対して熱心だったのも、かれらにとつて当面の問題が、古い封建貴族の勢力を駆逐して政権を掌握する必要に迫られたからであり、それが民衆・労働者の協力を要求したまでのことである。ここでかりにブルジョワを二つに分類してみると、封建貴族的ブルジョワと「七月王政」あたりから——つまり産業革命と並行して登場する——産業ブルジョワとなる。後者の政権獲得の闘争が前者と鋭く対立して、後者が労働者階級を意識していく過程がその概略である。こうした闘争は少し時代を遡って考察すべきであろう。すなわち、ウィーン会議後、フランスの空には三色旗に代り白旗が翻えったが、こうした「反動的」情緒の中にあつて、人びとが反発した理由は、産業ブルジョワの実利的抬頭であり、すでに経験した流血の中にも消え去ることのなかった大革命の根底たる自然法という「合理主義的」理念に他ならない。しかも「反動」政策は続行され、つづいて登場した過激王党と呼ばれたアルト伯(シャルル十世)は亡命貴族や僧

侶を優遇し、前よりもつもの「反動」政策はアンシャン・レジームに復帰せんとする政策であった。こうしたかれの財政処置

〔亡命貴族に十億フランを補償
金として与えたことなど〕

は当然のことながら、上昇ブルジョワと対立する

ことになったが、王が一八二八年、マルティニヤック、つづいて二九年、さらに「保守・反動」主義者、ポリニヤックを組閣せしめたことは、ますます議会における「自由主義」的下院を代表する上昇ブルジョワとヨーロッパ勢力均衡の政策を掲げる「保守反動」王朝と真向から対立することとなった。政府は当時のヨーロッパに瀰漫する「浪漫主義」情緒の中の「ギリシヤ愛護主義」を利用して、国内の関心をギリシヤ独立運動の干渉に転ぜせしめようと謀ったり、アルジェリア遠征をポリニヤックが断行したのも、ひとえに国内の矛盾対立解消の努力だと言われている。しかし、こうした政策はこの国においてもあてはまる通俗的歴史解釈であり、それがその場凌ぎのアナクロニズムと後世言われるようになったのは、フランス大革命の意義の再確認として、一八一四年の「シャルト」を振りかざして反動内閣不信任が提出され、議会解散となったからである。しかも息まきに絶えなんとするポリニヤック内閣の「シャルト」を蹂躪させる選挙法の改正、出版物の断庄……とうちつづくに及んで再度革命の旗、三色旗はフランスの空から白旗を駆逐して翻った。

フランスはここにおいてメッテルニヒ的ヨーロッパから脱し、七月王政が出現するが、新しい王政における下院議員の選挙資格はフランス近代史学の報告によれば、「今までの三十歳→三百F（納税額）から、二五歳→二百F（官吏、弁護士、医師、教授は百F）に、被選挙権は四十歳→一千Fから三十歳→五百Fに改められた結果、有権者は約十万人から二十五万人に増加したけれども、大多数の農民及び工業

労働者は、全部政権から排除せられていた上に、貴族はすでに土地を奪われていたから、イギリスよりも遙かにブルジョワ的寡頭政治に支えられていたことが分るといふ。

結局、七月王政は新しい産業ブルジョワの進出をみたとはいえ、あくまでもその主導権は、きわめて一部の上層階級・金融ブルジョワで占められていたことになる。それは「七月王政」を通じての有権者の数の急増をみれば一層明瞭に理解できよう。

われわれはここで七月革命が真に新しいブルジョワ、つまり産業ブルジョワの勝利ではなかったことを認めなければならない。故に民主的な選挙法改正という名目のもとで産業ブルジョワと労働者階級とが緩慢にも歩みよりをみせた——ガロディの説くように——とするならば、七月革命もその本質において、一七八九年のあの七月十四日と八月四日の擾乱の延長上にあると思われる。すなわち、アンシャン・レジームの末期における農民の革命への意志は、莫大な農地を獲得しつつあった上昇ブルジョワと門閥貴族——封建貴族との間における対立のもとで、かれらの革命への意志が必然的に上昇ブルジョワの目指す革命の限界を越えるものであったが故に、上昇ブルジョワは止む得ず一応封建貴族と妥協しなければならなくなり、かかる暫定的な事情のもとで上昇ブルジョワは自己の利益を、いかに増大する農民の経済的要求と調和させ、もしくは自分たちの利益内にそれを引き入れるかが、かれらの大きな課題となったといえる。一八三〇年以後の革命、叛乱、暴動の性格はこのようにしてその遡源を大革命に求めてみると、新しい意味をもって登場してきた産業ブルジョワの政治的要求と、産業社会の出現下において、初期資本主義の内的矛盾から出てくる労働者の経済的要求との間の心理のメカニズムがいとも酷似してい

か。リイルやルアンの如き工業の中心部においては、未曾有の住宅不足となっていた。そこで見いだされた解決策は貧民窟ということになった。失業者の数字は、ルイ・フィリップの治世には残されてはいないものの、一八三二年には、パリの人口の七分の一が、慈善団体に依存していると言われている¹⁵。

「七月王政」はついに最初の叛乱を経験する。すなわち、一八三一年、リオンにおいて絹織物工が武装蜂起した。絹工場側が、職工を解雇し、一日十八時間労働につき賃金十八スウに引き下げたがためであった。労働者の叛乱軍は暴動の年の十一月二十三日の声明文の中で「真の自由万才」と叫び、つぎのようにつづけている。抜萃してみよう。

「信用のおけない役人どもは、公衆の信頼を失ってしまった。かれらとわれわれとの間には、屍の柵がそびえたっているのだ。だから、どんな調停も不可能だ。リオンはそこに生まれた人々の手によって光栄ある解放をかちとつたのであるから……下略……」¹⁶。

また、同時代の経済学者コンスタンタン・ペクルルは、「持てる者と持たざるものとの闘いは、これより始まる」と説明している。そして、一八三四年には、「ふたたび前回よりも一層政治的色彩を帯びた本格的な階級闘争の性格をもつた暴動が再度リオンに勃発した。しかも今回の暴動は前回のよりも苛烈を極めたので、ブルジョワは社会が大きく変転し、労働運動は今や新たな重要性をもって浮び上がり、もはや閑却することができなくなってきたことを否応なく認識させられ

た。ギゾーは「覚書」の中でつぎのごとく記している。

「一八三四年の蜂起は、それがかかっているまったく政治的な旗印を、すべての人の前にくりひろげた。この蜂起は「共和国を！」というスローガンを声高く叫んだ。これは、一八三一年にくりかえされた「関税を！」というスローガンとは何とことなることだろう」¹⁸。

ここで明らかのように、三一年と三四年のリオンにおける叛乱は、社会主義的革命の前兆であったとみることができるところである。

ところで、この時代の労働者階級の生活の生活水準はどの程度のものであったか。フウリエは皮肉まじりでつぎのように書いている。

「フランスの労働者は大変貧しいもので、ピカルデイのごとき産業化された地方においては、その地方の労働者は、部屋に芝で作ったベッドを持たない。かれらは、枯草で身を横たえる場所をこしらえる。その枯草は冬になると、みみずがたくさんわいて、肥料にかわる。そこでかれらは朝、眼を覚ますと、父親も子供も、自分たちの身体にくっついたみみずを拂いのけなければならぬ。これらの掘立小屋での食物は、家具と同様にお上品そのものだ。『よきフランス La belle France の幸多き運命とはこのようなものなのだ』」¹⁹。

ルイ・ブランは一八三五年の労働者の生活水準を表現したつぎのような文句を引用している。すなわち

「Vivre, pour eux, c'est uniquement ne pas mourir」——彼らに

とって生きることが、ただ死なないようにというだけのもの⁽²⁰⁾

七月王政下の労働者たちは壮年・青年だけではなく、かれらの妻・子供・そして本人、要するに家族全部が構成で、しかも乏しい、僅かな食物を得るために一家族総動員で一日最低、十三時間～十六時間働かねばならなかった。同時代の経済学者ルイ・ブランは、「婦人労働者の賃金アヴェレージは、一日一フラン、子供は四五サンチームから七五サンチーム⁽²¹⁾」としている。そしてかれらの健康状態はすさまじいばかりに悲惨なものであった。すなわちつぎの報告が証明する。ヴィレルメ、ピュレの一八三七年の統計は、つぎのごときである。

「最も産業が発達した十県の一万の徴兵適齢者のうち、八、九八〇名が病身者であるか、あるいは栄養不良であった⁽²²⁾」と。

あまりの長時間の労働による成年男子の体力の減退と婦人の主婦としての家庭放棄に加えて、最も惨澹たる状況を呈したのは労働児童の尙僕病や幼児の怖るべき死亡率である。すなわち、ガッセ博士の『リールに関する報告書』Rapport sur Lilleはつぎの事実を指摘している。

「リールのロワイアル街では、生児三人のうち一人は五歳未満で死亡している。また、エクタ街だけをとっても、われわれの検証するところによると四八人生まれたうち、四六人が死亡している。こんな状態を見せつけられたあとで、だれがわれわれに死の前の平等を説きにくることができようか⁽²³⁾」と。

特に児童の酷使は目を覆うものがあり、子供はかせぐ割には食う方が少いということから……多くの労働者の父親たる資格は一つの経済投機 economic speculation になったといつてもよかつたという。かかる状況では、もはや労働そのものの存続があやぶまれ、雇用者側も何らかの合法的手段を考えはじめた。効果は無かつたとはいえ、フランス史上最初の労働法が一八四一年に議会を通過する。すなわち、「児童労働取締法」である。それによれば「八歳未満の児童が工場で働くことは認められず、八歳から十二歳までの児童の労働時間は八時間以内、十二歳から十六歳までは十二時間以内にかぎられる⁽²⁴⁾」という約束がとり決められた。

さて、以上、主として浪漫主義時代の社会的実態を素描した。かかる社会的基盤の上に、浪漫派の哲学者や文人・芸術家たちはいかに思索し、何を擁護したか。また急速に発展するジャーナリズムにもない、およそ古典主義時代、言い換えれば絶対主義的封建時代に較べて桁違いにかれらの言論は大衆に浸透していったことも、明治二十年代からの日本近代に似る。その底辺には横山源之助の『日本の下層社会』が厳存したのである。

一般に芸術的見地から浪漫主義の特徴の一つに「形式の破壊」が挙げられるが、このことは「浪漫主義」時代にあつては、かれらの思想や感情の形象化という営為が、すでに対象（大衆読者）を意識しなればおよそ意味のないものとなった事実を示すものである。「形式の破壊」とは、それが訴える「対象の拡大」を意味する。そしてこの場合の対象こそは、産業ブルジョワであり、金融貴族であり、労働者に他ならない。巨大な産業社会が出現するとともに必然的に発生してき

た社会的・経済的諸矛盾に対処した時、七月王政の浪漫派の人々はきわめて浪漫的にこうした矛盾の解決を志向したのである。これもまた日本近代に似る。そこにおいてかれはいかなる思想を抱いて行動したか。その思想の基盤はいかなる人びとに求められるべきか。またそうした思想と交錯して花吹いた、いわゆる浪漫主義文学は、結局はいかなる趨勢に赴いたか。また宗教は十八世紀が嫌ったキリスト教は？ わたくしは、なおしばらくそれらの諸点の「素描」をつづけなければならぬ。

II 社会的浪漫主義の思想的源流

七月王政の精神的危機は、産業革命の進行に伴って遂行された「産業の合理化」と、それに付随して増大した労働者階級とが、人びとの日常生活において、深刻な社会的矛盾を意識させたことに求められなければならない。これは政治、経済学史の通説であろう。したがってこの間において、七月王政にそれまで親しみのないタームが流通しはじめ。すなわち、「プロレタリアール」= *proletaire* (ルソーとフランス大革命の弁論者から借用したもの)、「カピタリスム *capitalisme* (チュルゴーによって最初に使用されたもの)」、「そして最も重要な「ソシアリスム」= *socialisme* (トランスノナンの大たビエール・ルールの書物において一八三四年に流通しはじめる)」等々の新しい言葉である。これらの用語は、歴史の荷い手として登場してきた産業ブルジョワの政治的闘争と下層大衆の経済的要求とから成る新しい社会的対立の発生を物語っている。かくてこの間、圧倒的勢力で蔓延し、人々の心を強く揺り動かしたものは言うまでもなく社会主義思想である。かかる思想の観念論的思索の跡を、わたくしは主として十九世紀ヨーロッパ政治思想史の

流れの中で、七月王政成立の五年前に歿したクロード・アンリ・ドルーヴローワー・サン＝シモン伯爵 Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon 1760-1825 の思想の中に尋ねてみたいと思つ。

フランスは社会主義の古典的祖国だと言われてきた。マルクス主義が、まず、アダム・スミスからリカードに至るイギリスの経済学と、ヘーゲルの弁証法によって代表されるドイツの哲学と、フランスの社会主義の三つの要素から成り、よし、マルクス自身がコントの実証主義の伝統に立ち、真に科学的社会主義を樹立したとしても、マルクスのフランスにおける交友を考へるならば、そこには幾多の浪漫主義的社会思想家がいたのであるから、その意味でマルクスこそフランスの浪漫派を「克服」し、ヘーゲルの弁証法的観念論に劇的な意味づけを行ったと解する方が妥当である。こうした現在の定説の深い意味をさらに深く理解するためにも、マルクスに先立つこと約半世紀、七月王政における社会主義思想の心情的基礎をなしたサン＝シモンは、この意味において、なおいっそう強調されなければならないであろう。なぜなら、「浪漫主義」の深淵ともいふべき不可解な情熱と度しがたい「近代化」への怨恨がそこに横たわり、問題はたんに文学芸術の枠内にとどまらないからである。

サン＝シモンは一七六〇年に生まれ、一八二五年に歿したから、第一帝政と復古王政の時代がかれの全著作の背景である。サン＝シモンは初期十九世紀思潮における二つの傾向を結びつけることにおいてなによりも独創的であった。一方で、カントやヘーゲルのごとく、その時代の「宗教」に直面しつつ、コントによって入念に仕上げられたヒューマニティーへの崇拜を展開し、他方においては一般の功利主義者

のごとく産業革命の危機に余りにも速く直面した。^①そこにはもちろんヨーロッパの長いヒューマニズムの伝統があり、急転する社会意識の転換による、技術の「社会的機能」という概念、「貧困と戦争の撲滅運動」という新しい歴史意識がある。匿名で出された処女作『ジュネーブの一人の手紙 Lettres d'un Habitant de Genève』から歿年の『新キリスト教 Nouveau Christianisme』に至るまでの矛盾と混乱に満ちた著作には、二つの支配的な命題に貫かれている。すなわち、

- (1) 応用科学 (Applied Science 原書の意はまさに科学を応用することである) の圧倒的な社会的必要性。
- (2) 大衆の文明を創造する必要性……

である。「カウンスル・オヴ・ニュートン ニュートン協会」の空想的な組織を企てたり、あるいは一八一四年、フランスとイギリスとの議会統合 Parliamentary Union を唱道したりした時、また自分自身の身の処し方において、かれは正気とは思われぬものがあると言われる。サン・シモンの生涯はゲーテが芸術において冀ったファウストを地でゆくかのごとくである。この高名な貴族の子孫は、アメリカ独立戦争に出征したり、パリで財産を蕩尽し、一文無しとなり、餓死寸前に追い込まれた時もある。パナマに地峡を切り開き、スペインに大運河を造ろうと計ったが、投機事業に失敗して投獄されたり、狂犬に噛みつかれ、ピストル自殺をはかったこともある。それと同時に哲学者、経済学者、技師、士官、社交人、宗教家でもあった。その人生は、まるで映画のシナリオのごときものであった。また一方、当時の政治を分析し、達識の指導者として、近代的技術による貧困と戦争の撲滅の唱導者として、変

りゆく歴史的発展に即応した社会における適切な信念の必要性を強調することに於いては、かれはまさに天才そのものである。だが、サン・シモンは「社会主義」の始祖であったとはいえず、あまりにも十八世紀的、「権威主義」的であり過ぎたため、自然権たる水平運動（階級差別廃止）を承認することができなかった。日本の明治の新知識のエリートたちの多くがそうであったように。「自由放任」laissez-faire はサン・シモンにとって、道徳的・心理的両面からむしろ有害なものとされた。能率と統制を崇拜したこの先駆者は、むしろ、技術主義者の草分けであるといつてよい。

バーク、ド・メーストル、コールリッジなどとともに、サン・シモンは社会的信念、忠節、形式崇拜を主張した。これらの徳目はナポレオン戦争後の混乱と無秩序の社会的背景——つまり反革命の歴史的風潮を髣髴させる。しかしながら——これこそサン・シモンが「反動主義」者と截然と区別されるものだが——かれは一方で人間は自分の生きる時代に適合すべきであると主張する。科学が約束してくれるものへのいささか憑依的な崇拜、これこそ、ド・メーストルなどとは大きく異なる点である。ド・メーストルが聖オーグスチヌスの中世を、コールリッジが伝統的教権階級制度を、カーライルが新しいそれを追憶している時、サン・シモンは、福祉国家への技術的な熱中、そしてある意味では歴史的に条件づきでのマルクスの概念を予見していた。イギリスのヴィクトリア朝の、あるいはつい今日までの支配的哲学である物質の進歩の礼賛は、サン・シモンの疲れを知らぬ筆で雄弁にかつ生きいきと表現された。

大革命とナポレオン戦争に支配されたかれは、すべての同時代の人と同じく、自分を取りまく現象のすべてを、社会的崩壊の兆しとみ

た。しかしながら、「人間は廢墟に住むためにできてはいない」で *humanité n'est pas faite pour habiter des ruines* と終始信じていたのである。そこで徹底的な科学者への信頼となり、産業社会の組織化は科学的選良でなければならなかった。もし彼等が新しい宇宙観を反映する支配的な倫理学を公式化し、普及させていくことができなかつたら、そこには健全な文明は棲息し得ないと信じた。ここにかれの最初にして最大の悲劇的にして喜劇的、断固としたドン・キホーテ的確信がある。

つぎに、*アプライド・サイエンス* (前述参照) がもたらす産業は、従来の神学と王権、聖と俗といったヨーロッパ的伝統にとらわれた政治学を斥け、人類の「改善」のために、己れの未曾有にして自由な力を働かせるであろうという要求である。就中、さきに掲げたように、大衆のための「最大多数の最大貧困階級の精神的・物質的改善」のために……である。ベンサムやコンドルセのように、かれは十八世紀の合理主義的世界観に育まれたので、「進歩」の観念と信じ、しばしば神の啓示を求めたとはいえ、その宗教は、世俗的、人間中心的宗教 *ego-centric religion* であつた。また、私生活では、名門貴族としてはあまり景氣のよいものではなかつたといわれるが、かれはちゃんと物質的基盤がなければ、精神的、道徳的進歩はあり得ないと信じた。ここから科学と行政による全人類の生活水準を約束する「産業社会」のユートピア的学説が生まれる。かれの説くものには、功利主義的要素が強すぎたために、多くの浪漫主義作家に不快を感じしめたとされる。だが、サン＝シモンには、革命的・夢想的・天才礼賛・宗教感情が底流していることから、結果的にはつねに浪漫主義的な歴史の相対主義に彩られている。そしてそのような二つの支配的命題が、

かれの全著作を支配していると言われる。J・ボウルはサン＝シモンの学説を四段階に分けてつぎのごとく論じている。⁽³⁾

- (1) 荒々しい浪漫的思想と哲学的思索が認められ、それらは最も広範囲に及び、かつ最も法外なかれの思想の局面を形成する。
- (2) ナポレオンの没落後、一八一四年におけるヨーロッパ統一の企てによつて代表される国際問題への短期間の関心、後、歴史家となつたA・テイエリーとの共同研究の時期。
- (3) 産業への関心と技術的政府の発展の可能性を考えていた時期。
- (4) 最後の著書『新キリスト教』に表現されている新しい宗教への関心。

サン＝シモンの代表作は正しくボウルの分類に即応して展開している。その間、かれは一八一七年一月、一万フランの補助金を得て、雑誌『*ランデューズ*』を発行してもいる。

ここでサン＝シモンのくだんの二つの命題に一瞥してみると、⁽⁵⁾ まず、かれの処女作『ジュネーブの住人の手紙』は匿名であり、馬鹿げたものであつた。著者自身でさえ不安げである。サン＝シモンはその本の存在には決して言及しなかつたといわれる。親友、ロードリーグには、『十九世紀哲学序説』— *Intruduction a la philosophie du XIX^e me siècle* が自分の処女作であると想像させておいたくらいだともいう。しかしながら、この処女作はその驚くべきスローガンでサン＝シモンの全著作の性格を決定づけている——アレキサンダー流の名譽以上、アルキメデイス流に生きる—— *Plus d'honneur pour les Alexanders, vivre les Archimédes!* とサン＝シモンは書いた。初期

大革命の軽妙な狂気じみた雰囲気に満ちているこの句は、同時に最初の命題を生き生きとうちだしている。アルキメデイスの指揮下で、「すべての人間は働くのである。」『Tout les hommes travailleront』ここではまた、技術主義テクニクラシーの別の普遍的な側面が予示され、それはまた重大な意義をもつかれの出発点であった。かれ以前の大方の政治理論家は、余暇を「最高の善」 a supreme good と考えてきたからである。その典型は軍人であり、土地所有者であり、思索する哲学者や大学の教授（現在の日本の大学教授を想像しないでいただきたい）であった。アリストテレスはライオンを百獣の王としたが、サン＝シモンにおいての百獣の王とは、ビーバー beaver なのである。この風変わりな伯爵は、アリストテレスにあやかかって、この産業的動物を掲げたのである。

後の極東の「経済的動物」の前奏曲である。つぎにこの『手紙』は世界的選良エリートのための狂気じみた計画に集中されてくる。「優れた学者や芸術家（三人の天才によって構成されるという）」のために、ニュートンの墳墓のための寄付金を募集し、かくして、かれらにはかれらの「労働」に相応した報酬を得せしめ、煩わしい物的労苦を免れしめようと計画したのである。さらにその謝礼金と交換に、天才たちは一定の計画に基いて人類の精神的必要物を供給しなければならぬという次第である。このような手段で天才たちは「大衆」と統合すべきだと言い、「大衆」が困窮するのは天才 man of genius の「怠慢」のなせる業だというのである。

サン＝シモンは要するに選良と「大衆」との相互契約を提起しているものであり、後世のマルキストのように、学者とは「科学労働者」のことであり、「技術熟練者」であり、これに絶大な権威が与えられる

死語としての「浪漫主義」井上英明

のは、未来を予見することができるからということになる。さらにかれは、社会問題は「生理学」によって解明できるとする。科学によって「産業を組織」する——つまり、各部間の技術的熟練者がこれに当る。では何がそう要請するのか。サン＝シモンが空想家と言われ、神秘主義者になるのは、実にこの点においてである。すなわち、それは「神の御声」に他ならぬ。ニュートンへの崇拜は、サン＝シモンの幻想の中で、神がかれに囁きかけるからである。地上を樂園にし、戦争を廃止し、産業的平和世界の実現は、サン＝シモンにおいても神の意図するものであった。この『手紙』の内容は、ここで終わっている。

この『手紙』の獨創性は、結局、かれが新しい技術テクノロジイの概念を提起した事実にあるといつてよい。そしてこの「理論」が、七月王政の「産業革命」の推進力となったのもまた事実ある。サン＝シモンの科学崇拜は、さらにつぎの二書においてますます発展する。すなわち、一八〇八年の『科学研究序説』と一八一三年の『人間科学論』。前者においては、まず、デカルトが信仰を推理と観察に置き換えたことによって、デカルトの偉大さを認める。しかし、サン＝シモンにすれば、ベーコンの方がさらに偉大なのである。すなわち、「ベーコンの科学に匹敵する新宗教の確立」にかれは努力する。言い換えれば、ヨーロッパの自然哲学の伝統的命題たる科学と宗教を、いかにして合致させるかということであった。かれは哲学者の名において、知的指導者階級に訴える。その当時としては、すこぶる斬新な社会意識が一八一九年の『寓言』に明示されている。

——五〇人のそれぞれ一流の物理学者、化学者、病理学者、銀行家、

二百の一流商人、六百人の最上の鍛冶屋等々を失ったとしたら、フランスはたちどころに脱穀ぬけがらとなろう。フランスは直ちに競争国に対して劣勢となり、この損害を補充し、新しく首脳をそろえないかぎり、何時までも隷属することになろう……科学、美術、工芸の分野で有能な人たちを一人も失わなくとも、不幸にして一日の中に、国王階下の御令兄アングレー公……を失い、同時にすべての侍従官、無任所であるなしを問わず全国務大臣、全顧問官……すべての樞密官、大司教、知事、郡長……そして又、貴族のような暮らしをしている地主の中でも最も裕福な万余の人達などを失ったとすれば、フランス人がこの禍に傷心することは疑いない。彼らはそれ程善良なのである。しかし、国家にとつて最も重要な、これら知名の士の三万人を失っても、与える悲しみは感傷的なものにすぎない。国家の政治には何ら支障をきたさないからである。

この思想の根底にあるものは、生産階級のみが未来に属するという一事である。そしてすべての領域で卓越した能力をもつ者が、そうではない人びとを統制コントロールすべきであるというヨーロッパにおけるエリート概念の基本的な性格の設定である。十九世紀の文学思潮を鳥瞰しえたG・ブランテスのいささか古典的論調は、いまでも説得力を失っていない。

——当時のフランス経済学者が各個人に其の機能の自由な発展を保證せんとしたのに反し、サン＝シモンは国家に干渉を求めた。国家は労働を組織すべきである。国家は人間が人間に使役され続けなければならないように、人間が自然を使役するに止まるように取り計うべきである。最後

に国家は自然的不平等には触れることなく、社会的不平等を除去すべく、従つて身分に基く特権を廃止すべく、少くとも相続権を調整すべく努力すべきである——

自由競争への最初の疑惑、「各人その能力に応じて」*à chacun selon sa capacité* という新しい労働観、われわれはここにおいて、近代社会主義の源泉を指摘することは容易だが、サン＝シモンは始終、世俗的ポピュラーな宗教による知識階級の産業統制を説いていることを忘れてはならない。

「世俗的宗教」こそ貧民を救済できると信じたのである。「新宗教」、すなわち『新キリスト教』はこうした政治的浪漫主義によるサン＝シモンの宗教観の発展に過ぎなかった。

つぎにサン＝シモンの「国際問題」への関心として「組織化」という概念を考察すると、この概念の根底はかれの一種の歴史観に要約されると思われる。

一八一四年以降になるとサン＝シモンはもはや、ボナパルトをあてにはせず、新世界建設を夢想するようになる。すなわち、ナポレオンが没落するや、かれの脳裡に去来したのは全ヨーロッパ的政治の「再建」であった。一八一四年頃までのかれは、科学を政治と社会の歴史に適用することで満足していた。そのかぎりにおいてかれは、十八世紀の子であり、進歩の理論の弟子であったといえる。しかし、この十八世紀的世界観に、新しい、しかも「浪漫主義」的歴史意識が加わったのである。その中で重要なのはイタリアの歴史家、ヴィーコ Giambattista Vico 1668-1774 の歴史循環の学説である。スタール夫人の『ドイツ論』*De l'Allemagne* に魁をなしライン河の詩的幻影とし

てのドイツがフランスにおいて次第に新しく評価され出し、文学ではゲーテの『ウエルテル』をはじめ、哲学では、ヘルダー、レッシング、カント等が続々とドイツ人によってフランスに宣伝されていた時、このイタリヤの孤獨な歴史家に対するフランス側の反応はどうであったか。わたくしはふたたびここでも古典的研究の訳文からつぎのような一節を引く。⁹⁾

——ブルボン朝復古期のフランスは、スタール夫人が宣伝した幽言なドイツ思索から新しい光を求めはじめた。ヘルダーの「観念」はエドガー・キネによって、レッシングの「教育」は、ユーゼーヌ・ロードリグによって訳された。クーザンはヘーゲルの足許で教育を受けた。同じ頃に歴史哲学に興味をもつ人々にとって暗示にとめる一人の新しい大家がイタリアで発見された。ヴィコ(ママ)の「新科学」 *Scienza Nuova* は、*マシユレ*によって翻訳された……彼の思想は十八世紀に適合しないで十九世紀の人心を動した。かれは「進歩」の理論を何ら提唱した事もなく又考えた事もなかった……この種概念(ヴィコの)はヴィコの時代又は次の世代に理解されなかった。「新科学」は、モンテスキューの書齋に備えてあったが、彼はこれを利用しなかった。ドイツの新観念論哲学が問題となったとき、またフランスの観念論者が、ヴィコ自身と同じく社会現象を説明するために総合的原理を求めている時、この概念がフランスで興味をひくようになったことは当然である」

それではヴィコの循環の理論の概要とはいかなるものか。

——彼の基本的概念は、社会の歴史の説明は人間精神の中に発見されるべきであるということであった。最初に人間は世界を考えるよりもむしろ感じた。これは政治組織をもたない自然状態にある野蛮人の状態である。第二の精神状態は想像的、すなわち「詩的知慧」であつて、これに応ずるものは一段と進歩した英雄時代の野蛮状態である。最後に概念的知識がくる。これがすべての社会の通過する三段階である。この各々の類型が法律、制度、文学、人間の性格を決定する」

ビュリーは「進歩」の立場から右のように論じているが、しかしデカルト的合理主義の支配的世代にありながら、神と人間社会、神学と歴史学を截然と区別したのはヴィコにはじまる。したがって、件の人間が経なければならぬ三段階はまず、神の時代であり、これは少年の時代、物心融合の諸民族におけるゲマインシャフト的原始宗教の時代である。つぎにかかる状態から巨大な家族が出現し、民族間にも巨大な民族が出現する英雄の時代に入る。これは青年の時代であり、政治においては、貴族制で文化は詩歌の段階である。そして最後に人間の時代、すなわち壮年、老年の時代となり、創造力は衰え、すべてが思索的、反省的、末梢的、形式的になり若々しさを喪失した時代となる。ヴィコのかかる浪漫的歴史意識を強調すると、十九世紀浪漫主義に与えた影響は、歴史哲学においてはルソーよりも、より高く評価されるべきであろうと思う。サン・シモンの十八世紀的合理主義の進歩観に、ヴィコの浪漫的歴史意識が復活したわけである。J・P・メイヤーはつぎのごとく論じている。西洋史学に不案内な稿者には分りやすい叙述である。

——サン・シモンの歴史理論はコンドルセーに非常に負うところがあるが、かれは、歴史過程はたえず反復される、組織的、批判的段階《Les phases organique et critique》の交代の法則が存在していると主張しているのであって、それだけに抽象的な構成を入れる余地が一少ないのである。こうして、前ソクラテスのギリシアは批判的時代であった。ローマの歴史は、ルクレティウスやキケロのころに、組織的段階から批判的時代へ移った。中世の封建主義は六世紀以来ずっと、すなわち、キリスト教会の建設が決定的となったころから組織的時代であった。十六世紀の宗教改革や哲学と共に、ヨーロッパの歴史に第二の批判的時代がはじまったが、サン・シモンの見るところでは自分の教説によっておわりを告げるのであって、産業主義ラジエ・ユストリアスムの時代がはじまるのである。¹¹⁾

こうして十八世紀的進歩とヴィーコの循環リコルシの理論を結びつけたサン・シモンの歴史哲学は、七月王政の現実的勢力を有するに至ったといわれる。この事實は、十九世紀初頭、その期におけるヨーロッパ浪漫主義が、多くの思想家、文人たちに浸透していたことを物語る。サン・シモンは、科学的法則と同じような社会法則を求めたが、科学的仮説に基いた社会法則乃至歴史法則は、すなわち、批評と革命の時代と組織と建設の時代が交互に継起する歴史循環の法則となつたわけである。

ヴィーコの循環リコルシにおける浪漫的歴史意識が、後、シュペングラールの『西欧の没落』に復活したように、サン・シモンは、十九世紀初頭に、進歩と没落、十八世紀と十九世紀の交錯した中にありながら、かれが対決しなければならなかったのは「組織」ということに他ならなかった。しかも中世における僧侶の役目が、新しい産業時代において

は科学的選良に変わった。シュペングラールやトインビーの没落意識の背後には、今世紀の世界大戦によるヨーロッパ的秩序の危機があったように、サン・シモンの弟子たちが整理したかれの歴史理論の背後にも当然、ナポレオンによるヨーロッパ的カオスが予想されはしないだろうか。ここでかれがウィーン会議中に、A・テエリーと共同執筆した『ヨーロッパ社会組織論』に注目してみよう。そこには、明らかに、かれのなみなならぬ努力の跡が窺われるからである。

——前世紀の仕事は革命的なものであった。十九世紀のそれは、組織化という事ではなければならない。ナポレオンの没落は、その機会を提供している。大革命からナポレオンにと続行した擾乱は当然、ヨーロッパの社会的構造を破壊したことに帰す。しかし人々は、バーバリズムと愚行の間を選ぶ必要はない。世論が、世界を支配するからだ。十五世紀以前には全ヨーロッパは、単一の政治組織の時代であった。しかしこの秩序はルターによって難船させられた。ウェストファリア条約は、勢力均衡に基づく新しいヨーロッパ的秩序を企てたが、この新しい条約は新しい戦争を意味した。すなわち「ウェストファリア条約以来ヨーロッパの状態は戦争であった」。Dupuis la Traite de Westphalie la guerre a été l'éta de Europe. この時から強力な政治と常備軍の世界がはじまる。この無秩序から英国が利益を得て、今や世界を支配せんとする。つまり、「内には自由と平和、外には冷酷と専制主義」である。¹²⁾

しかし、サン・シモンの目的は「ヨーロッパの再組織」であった。そこでかれは、田敵イギリスとフランスとの協調を提起したのであ

る。両国が政治的原理の点で一致するが、利害関係も一致が実現すれば、ヨーロッパもまた平和と幸福を期待できるだろうとした。また、かれは当時開かれていたウィーン会議も非難した。この会議がおのれの国家利害のみ、さらに言えば君主国家間の代表者の利害で構成されているからで、こうした会議が増えれば戦争に導くだけだとし、貴族間の「保守性」を糾弾している。つまりサン・シモンにとってはウィーン会議もウェストファリア条約の延長に過ぎず、最終的解決の不可能を暴露するものでしかなかった。

それではここで、サン・シモンはいかなる「組織」を望んだのか。真のヨーロッパ政府は、組織的で、均質的 homogeneous で、国家的政府から独立し、普遍的なヨーロッパの利益に従事し、ヨーロッパの世論に基づいていなければならぬものとされた。あたかも現在の EEC (欧州経済共同体) 構想を先取りしたかのようなかれの直感と行動力に驚かされる。英・仏との経済的の握手への希求も同じである。かれにとつての「再組織」とは、「ヨーロッパ国家」という政治的版図の実現であり、英国の「勢力の均衡」という伝統的政策が英国を利するのみで、ヨーロッパの利益を意味しないことを、かれは見抜いていた。サン・シモンという名門貴族は、新しいヨーロッパの秩序の政治的体制を「立憲政府」に基づいていなければならぬものとして、その範を「英国」に求めたのである。

——「立憲政は英国に存在している。下院は政治家からではなく芸術、科学、法律、実業の各分野に於ける選良から選出されなければならぬ。王がヨーロッパ議会の王であるためには、どうしてもフランス・プロテスタント・カトリックの王であるためには、どうしても英・佛・統・合が不可決の要件である。なぜなら両国は革命によって

脅威をうけた。そこで両国は共通の利害をもつ。英国は、マキヤヴェリ式のエゴイズムを実践する必要はもはやない。その思想の帰結は数々のヨーロッパにおける戦争であったのだから。イギリスは、フランスとの連合によって救われるであろう」¹³⁾

かれの思想はこのように一見、革命的であるというより進化論的である。そして家庭は、超国家的秩序に包含されなければならなかった。ヨーロッパの立憲政府は、超国家的利害とヨーロッパ的世論の創造のために実際の計画に参与するからであった。

サン・シモンの晩年の著作は、『新キリスト教』である。「新」という意味は大体つぎの理由からである。かれは新教・旧教両方とも非難する。

——カトリック教徒は——サン・シモンは信じた——最大の異端者である。かれらは俗人 *laity* を圧迫し、技術的進歩を無視した。かれらは神学ばかりを研究した。僧侶は大衆の生産の可能性に盲目であり、産業的企業を麻痺させた。一方プロテスタントの欠点に転ずれば、サン・シモンはルター攻撃に集中する。——今日のキリスト教は貧困をなくすために全世界を組織せねばならぬ。プロテスタントは宗教戦争を遂行した時、その機会を失った」¹⁴⁾

ボウルが右のように論じているごとく、サン・シモンは新旧両教を排し、世俗的意味において、「新」しかつたのである。かれの宗教は、あくまでも大衆の物質的改善における道徳的・精神的「進歩」を要請するものに他ならなかった。しかも、かかる宗教こそが、かれにとつ

ては、貧困と戦争を廃絶し、新しい「組織」を助成するものであった。したがって、かれのキリスト教は従来のごとき精神と物質の二元論ではなく一元論である。「神は一つである。神は存在の総てである。総ては神である。神は精神及び物質として自己を啓示する宇宙的愛である。そしてこの三位一体にたいして宗教・科学・産業の三世界が呼応」する(傍点引用者)。「新キリスト教」は、神政同盟の王公たちへのつぎのような訴えで結ばれている。

——諸君たちはシーザーの後継者である。諸君たちは武装した二百万の兵士を持っているし、最大限に課税する。だが諸君たちは一体貧しい人たちのために何をしているのか。王公たちよ！神の御声に耳を傾けられよ。神は私の口を通して諸君達にこう語っているのだ。元のような善良なキリスト者たれ、傭兵や貴族や異端的な聖職者や、邪悪な裁判官をなんじの主要な支柱と考えるのはよせ。キリスト教の名に団結し、神が権勢のある者たちに課しているあらゆる義務を果たすように努めよ。かれらの権力を貧しき者の社会的福祉のできるかぎり速かな増加のために使用するよう神が命じていることを忘れるな⁽¹⁶⁾

ここには、サン＝シモンの生涯における窮極の宣言がある。その思想があまりにも幻想的で、非実際的であるといかに非難されようとも、かれの「技術」という概念や、「組織」の根底たる歴史理論の斬新さ、宗教の世俗的解釈——それはヨーロッパ「浪漫主義」の特質の一つとしての「中世への郷愁」という心理的傾向が内在していたにしても——や、知的選良の団結などは、七月王政が成立するや、産業革命の理論的支柱となり、ジャーナリズムの急速な拡大とともに大衆

を動かしたにちがいない。

また、かれの歴史理論が同時代のドイツの哲学者のように「国家」に止揚され、神秘化される方向をたどらず、新たに社会意識を覚醒させるところとなり、自分の時代を「組織的時代」として見きわめ、「ヨーロッパの再組織」という命題に社会学的な転換をころみたかれの生涯の奮闘ぶりは、今世紀末のヨーロッパと共生を祈願する二十一世紀の世界秩序に深刻な問題を突きつけてくる。わたくし個人にとつては「句読点」のない日本語による言語文化の中に身を置いて、「天皇制」立憲議会民主制になじまいヨーロッパの国家観、それが「浪漫主義」という「訳語」の中で日本近代文学の始発とどう比較され、みのりある解釈にどう近づくかが、これからの興味尽きない課題である。(未完)

注

序説

(1) 高橋義孝訳では「ロマンチック」を「北の幽霊」とし「クラシック」を「南方古代の幽霊」とする。『ファウスト』(二)『新潮文庫』一四七頁。これがゲーテの時代の即した新しい解釈であろうが、ドイツ語原文では、「ロマンチックの化け物」は *Romantische Gespenster* であり、「クラシック…」の方は *Klassische Gespenster* であることから、高橋訳より、原語の字義通りの鶴外訳をよむ。

(2) 『悪の華』シャルル・ボードレール 斎藤磯雄訳(東京創元社)三三四―三五頁。

(3) 『ランボオ全集』II『文学書簡』(一八七〇―一八七五)九、ポオル・ドウムニール宛、平井啓之訳(人文書院)、二〇三頁。

(4) 例えは J. M. Roberts, "The Pecican History of The World, Book SEVEN, The End of Europeans' World, PP. 803-894."

I

(1) P. Hazard, "Il y a cent ans" (*Revue des Deux Mondes*) 15, oct. 1935. in David Owen Evans, *Social Romanticism in France, 1830-48*, Oxford, 1951, p. 1.

- (2) D. O. Evans, *ibid.* p. 1.
- (3) ヌオルク・フランナス著 内藤灌・葛川篤訳『十九世紀文学思潮史』(三)の第五卷「仏蘭西の浪漫派」第一章、六頁。邦訳引用文は原文のまま。以下同じ。
- (4) J. P. メイヤール著 五十嵐豊作訳『フランスの政治思想—大革命から第四共和政まで—』(若波書店)第二章、六一頁、「追想(メモワール)」から間接引用。
- (5) Evans, *ibid.* p. 2.
- (6) J. M. Cohen, "A History of Western Literature, Pelican Book, A. 371, 1956, p. 249.
- (7) 'Avenir du Monde', published by Saint-Beuve in 'Revue des Deux Mondes', 15, April, 1834, from Chateaubriand's 'Memoire d'Outre-tombe, quoted by Evans, *ibid.* p. 3.
- (8) G. カロライ著 平田清明訳『近代フランス社会思想史』第五章、二七四頁。
- (9) 『西洋近世史』(京大西洋史・中)(創元社)第三章、三七一頁。
- (10) J. P. メイヤール『前掲書』七三頁。
- (11) 帆足園南次著『イギリスの民主主義文学』—その基盤と系譜—(淡路書房)第一部、十五—五五頁、参考。
- (12) Charley, 'La Monarchie de Juillet', pp. 210-211, quoted by Evans, *ibid.* p. 3.
- (13) G. カロライ『前掲書』第四章、一七一—一五頁。
- (14) G. カロライ『前掲書』第四章、一七五頁。
- (15) Evans, *ibid.* p. 5.
- (16) G. カロライ『前掲書』二七八頁。
- (17) C. Pecqueur, 'De la Reforme industrielle, 1832, quoted by H. Bourgin in 'Revue Socialiste', x/v, 417, in Evans, *ibid.* p. 5.
- (18) G. カロライ『前掲書』第五章、二四九頁から間接引用。
- (19) C. Fourier, 'Le Nouveau Monde industriel' in 'GEVRE', vi 30-31, quoted by Evans, *ibid.* p. 6.
- (20) Louis Blanc, 'Questions d'aujourd'hui et demain' 41, in D. Evans, *ibid.* p. 6.
- (21) Louis Blanc, *ibid.* 91, in Evans, *ibid.* p. 6.
- (22) G. カロライ『前掲書』第四章、一七七頁に引用。
- (23) 同右、同頁。
- (24) Evans, *ibid.* p. 7.
- II**
- (一) John Bowle, "Politics and Opinion in the 19th century," chap. IV, p. 102. なお、J. ボウルはサン・シモンへの政治的影響として、アンファンタン等の浪漫主義的社会主義よりもコントの実証主義の方を強く認めている。同書一〇六頁参考。なお、本稿でのサン・シモンの生涯に
- についての知識の多くはボウルの同書に負うところが大きい。
- (2) ルイ十四世時代「回想録」を書いたサン・シモン公爵 Louis de Rouvroy, Duc de Saint-Simon 1675-1755 の grand nephew にあたる。「回想録」は宮廷文学として「源氏物語」としては比較される。サン・シモンがコント流の「実証主義」者ではなく、「浪漫主義者」であったことは、かれのつぎのような逸話で想像されよう。又、彼はシャルル・マーニユの後裔だと主張して、
- 「リュクサンブール(かれが大革命中に試みた投機事業に失敗して投獄されたことをやまず)に私が抑留された一夜(一七九三年)シャルル・マーニユが現われて私にこう告げた。世界が存在してからの方、如何なる家門も第一級の英雄と哲学者を生みだす光栄を享受したものはない。わが子よ。この名譽は我が家門のためにとっておかれたのだ。お前の哲学者としての成功は、軍人として又政治家として余のかちえた成功に匹敵するであろう。(アルベル・テイホーデ訳者代表鈴木信太郎『フランス文学史』上、第一篇の二三、平岡昇訳一四八頁からの逸話。ダウイド社刊)
- (3) John Bowle, *ibid.* p. 105.
- (4) 前に述べた英仏の「議会統合」Parliamentary Union はその現れである。
- (5) John Bowle, *ibid.* pp. 106-114.
- (6) Roger Daval, "Histoire des idées en France", Collection Que sais-je? No 593. 邦訳は患田孫一・中村雄二共訳『フランス社会思想史』(白水社)一四四頁。
- (7) G. フランナス『前掲書』三三三頁。
- (8) 同右書、三三三頁。
- (9) ルネ・レイノオ著 佐藤輝夫訳『近代仏蘭西に及ぼしたる独逸の影響』(理想社)第二部(一八五一—一九一四)に詳しい。なお本書は十八世紀と十九世紀の独・仏比較文学研究の名著名訳である。
- (10) J. コッリー 高里良泰訳『進歩の観念』(John B. Bury, "The Idea of Progress") 二六五—二七頁。
- (11) メイヤール 五十嵐訳『前掲書』七八—七九頁。
- (12) John Bowle, *ibid.* pp. 109-110.
- (13) John Bowle, *ibid.* p. 111.
- (14) John Bowle, *ibid.* p. 112.
- (15) J. コッリー 高里訳『前掲書』。
- (16) John Bowle, *ibid.* p. 114. J. P. メイヤール『前掲書』八二—三頁参考。